

平成 29 年度まちづくり座談会における質問・要望事項と回答

■十王地区：7月26日（水）午後7時30分～9時 参加者数 43名

Q. この度の九州北部豪雨でも、川の流れの中にある橋脚に材木等が引っ掛かり、水があふれ出したという指摘があった。新しい荒砥橋については、一本の橋脚だけが川の中に入ると捉えてよいのか。

A. 通常の川の流れであれば水のかかる橋脚は一本だけだが、大雨が降れば川も増水するので、ほかの橋脚にも水がかかる可能性がないわけではない。

Q. 三番坂から橋にかかる部分までの勾配は、今までよりも緩やかになるのか。

A. 橋は現在の荒砥橋の高さよりも若干高くなる予定だが、三番坂の方の勾配が変わるということはない。ただし、改善できるところはいずれ改善していきたいと考えている。

Q. 現在、火葬場へは荒砥橋の鮎貝側から出入りしなければならなくなっているが、新荒砥橋が完成してからも出入り口はこれまでと同じと考えてよいのか。

A. 基本的には同じだが、工事の途中で一部カーブしたりする箇所も出ると聞いている。また、基本的には通り抜けられなくなることはないような前提の中で工事を進めていくと聞いているが、一時通行止めになる場合もあるかもしれない。その場合に備えて、別なルートで火葬場まで行く検討も進めてはいるが、いずれにしても現在の道が大きく変わることはない。

Q. 荒砥橋の架替工事については、県の事業ということで予算は組まれていると思うが、町としての経費は全くかからないのか。

A. 荒砥橋の架替については、県による荒砥橋工区の工事になっている。これは県の単独事業ではなく、補助等を活用した事業になっているので、町の負担は発生しないということになっている。

ただし、工事に関連して町が県の道を占有している施設（上下水道管など）を移設する場合は、町の負担となる。

Q. 新荒砥橋が完成した際、現在の荒砥橋はどのように撤去されるのか。

A. 平成 32 年の新荒砥橋の供用開始を受けて、平成 33 年度から平成 35 年度までの 3 年間に撤去する予定になっている。

Q. 新しいコミセンについては、県内各地から人を呼び込めるような紅花拠点施設と捉えてよいのか。また、その場合は町からどれくらいバックアップしていただけるのか。予算等も含め、施設が完成してからの構想をお聞きしたい。

A. 施設については、紅花を活用して「日本の紅（あか）をつくる町」をPRしていくことを目的に、地方創生拠点整備交付金をいただいて整備していくことになる。なお、施設をつくるにあたっての成果という部分では、施設をつくることによって町全体をどのような方向にもっていくかという数字目標を掲げさせていただいた。十王地区だけでなく、町全体として紅花振興による地域振興をどのように図っていくかという視点で取り組んでいきたいと考えている。例えば、新しい施設を使って紅花栽培の講習会を行ったり、教育旅行で訪れた子どもたちに紅花染めを体験してもらおうスペースとして使っていたりしながら、紅花振興を図っていききたいと考えている。ただし、十王地区のコミュニティセンターという機能も持っているので、それらも使えるように調整を計りながら整備を行っていききたい。

事務局長：地区としては、平成 30 年度から 33 年度までの「第 2 次十王地区計画」を策定しているところである。その中でも、紅花を活用した地域づくり、地域振興について検討しているところなので、地区の皆さんの意見をお聞きしながら進めていきたいと考えている。

Q. 日本の紅（あか）をつくる町推進拠点施設整備の事業費の半分は国から出るようだが、残り半分は町民の負担になる。このことについて町の考えをお聞きしたい。

A. 費用負担については約 45%が国の交付金で残りの部分が町の負担となるが、この部分については過疎対策事業債を予定している。この事業債については元利償還金の 7 割が交付税で措置される制度なので、残りの 3 割が町の負担ということになる。来年度の部分（外構工事、備品購入）についても全額を過疎対策事業債で対応したいと考えている。

Q. 日本の紅（あか）をつくる町推進拠点施設は、コミセンとしての機能も併せ持ったものとのことだが、今までのコミセンの計画だと防災的な機能が必要だということだった。今回は、その点を十分に考慮したうえでの施設設計になっているのか。

A. 今現在の十王地区コミュニティセンターについては避難所の指定にはなっておらず、

山峡体育館が十王地区の避難場所になっている。ただし、災害等があった場合には新しい十王コミセンが十王地区の災害対策の拠点になるのではないかと考えている。そのために非常用電源を設け、電源が切れた際には非常用電源から電気をとれる設備は準備したいと考えている。また、倉庫についても予定しているが、その一部については防災関係の資材等を保管できるような形を予定している。

Q. 屋根の勾配が緩いようだが、雪の処理はどうか。また、併設する道路との高さにだいぶ差があるようだが、そこに雪が溜まったりすることはないのか。

A. 屋根の勾配については設計業者とも詰めて議論させていただいたが、十王地区は町内でも雪が少ないところであることから、例年の積雪の状況をベースに検討し、雪下ろしをしなくても済む構造にさせていただいた。ただし、数年に一度は大雪となることもありうるので、その際は安全面なども考慮して専門業者に依頼する方向で考えていきたい。

高さについては、一番高いところで現在の道路の高さより4mほど低くなる。離れについては、道路の路肩から5mほど離れることになる。

Q. 十王地区には子どもの遊ぶ場所がないことから、新しい施設の整備と併せて検討していただきたいという話だったが、その件についてはどうなっているのか。また、近頃は山峡グラウンドの遊具で遊ぶ親子の姿を目にするが、施設を建てることでそれらがすべてなくなってしまう。その点についてはどのように考えているのか。どこかに代わりになるものをつくってもらえるのか。

A. 施設の建設に伴い現在のグラウンドや遊具は撤去することになるが、外構については平成30年度に整備する予定となっており、全体的にどのような形にするかという計画についてはこれから詰めていきたいと考えている。また、子どもの遊ぶ場所の確保については、十王地区の皆さんの意見をいただきながら検討していきたい。

Q. 道路から5m離れているとのことだが、できれば8mくらい離してもらえると、冬に大きなロータリーが入ってきたときに雪を掃きやすいと思う。

A. 基本的には雪下ろしをしない予定で計画しているが、どうしても雪下ろしで出た雪を処理しなければならないという場合には、小型のロータリー車は入れる幅になっている。

Q. 介護予防について、現在はコミュニティセンターで行っている町の事業に参加させていただいているが、来年度からは町とは関係なくなり、それぞれのコミュニティセンターで介護予防の事業を行うという話を聞いた。参加できる対象者や費用なども含めて、具体

的にどのような形になるのか。

A. 平成 29 年度から、要支援認定を受けている方へのサービスの提供などが変わったりしている。認定を受けていない方も認定を受けている方も、町で事業を実施するという形になっており、今回その中でいろいろと事業を整理させていただいた。来年度からはコミュニティセンターが主体になるとの話だったが、今現在、介護保険の第 7 期の計画を策定しており、この中では平成 30 年度から地域での包括的な支援をより一層強化していくということ踏まえた中で介護保険制度の改正がなされることになっている。

なお、具体的にどのような形で地域の高齢者の方を支えていくかについては、平成 30 年度からの法律の改正の枠組みの中で町が行っていくことに間違いはない。元気な高齢者を対象とした事業と要支援を受けている方へのサービスの提供を実施する方法として、例えばコミセンの力をお借りして実施していくものも出てくるが、各地区に丸投げするようなことはない。現在行っている事業でも、実施主体がどのようなようになるか決定していない部分はあるが、今後も継続していくような形で整理させていただくことになると思う。

Q. 陽光学園前の道路が改修されたわけだが、実際に計ってみたところ白線と白線の間が 4m くらいになっており、乗用車同士の擦れ違いはもとより、マイクロバスも多く通る場所なので、都度一時停止しなければならない状態になっている。さらに、センターラインも引かれていない状態だが、通行する車が何台以上であればセンターラインが引けるのか。

A. 陽光学園前については、歩道を整備することを目的に改良を行っている。今年度で概ね完了の見込みになっていたが、若干予算が不足していることから来年度に少しずれこむ予定になっている。なお、歩道の整備ということで大幅な拡幅ということではなく、車道の幅員が 4m ということになることと基本的にはセンターラインは引かないことになっている。ある程度の交通量に応じた道路の幅員と、それに伴うセンターラインの整備という話になるが、陽光学園前の谷町一八ヶ森線については、拡幅ではなく歩道整備ということでご理解いただきたい。

Q. 新しいコミセンが完成した後、現在のコミセンはどうなるのか。

A. 今後意見等をいただきながら検討していかねばならないが、基本的にはなんらかの活用を行っていきたいと考えている。

Q. 新しいコミセンの位置について、十王地区の皆さんはすぐ分かると思うが、他地区や他市町村から来る方には分かりづらく説明もしにくい。そこで、国道からどこへ入ったらよいか分かるような案内板を設置してほしい。

A. 位置がわかりやすい標示の設置を検討していきたい。

Q. 「日本の紅（あか）をつくる町推進拠点施設」として「(仮称) 紅花ふれあい交流館」という名前が付くことになるわけだが、そうなれば紅花まつりの新たな会場にならざるを得ないと予想される。実行委員会では、これまで滝野地区の方が一生懸命がんばってこられて地区を挙げて紅花まつりを行っているわけだが、萩野地区を含めた3地区で共存できるような協力体制が重要になってくると思うので、その際には町が指導的な立場で力添えをしていただきたいと思う。

また、今後も質の良い紅餅を作り続けていくために、摘み手の確保や後継者についての配慮がますます必要になってくると思うので、その点についても町からの支援をお願いしたい。

A. 紅花まつりは、滝野交流館をメイン会場として、萩野大日堂、十王八卦地区を中心会場に開催させていただいており、実行委員会には、十王、滝野、萩野、中山の4地区の区長さんにも入っていただいている。また、昨年は約180kgの紅花を生産し、130kgの紅餅を納めさせていただいた。紅花栽培そのものを広げていくために、現在は生産者の仲間づくりが大きな課題となっている。畑を作る部分の技術はもちろんだが、花を摘むという作業の拡大をしていく必要があり、現在は紅餅を作る方が摘み手の方に賃金を支払っているが、その部分を町で支援できるようなシステムを検討していきたいと考えているところである。